

☆ 子ども会 (学習会) だより ☆

MY SKY 第17号

マイ スカイ

1996年9月24日火曜日発行(毎週火曜日定期発行)

発行者

板野中学校

学習会

編集・文責: 吉成正士

いそが 忙しい^{しゅうまつ} 週 末も終わり、いよいよ2年生の修学旅行、全体学習、板中同研が近づいてきました。それぞれの行事に、同和教育に^{かか}関わる共通のテーマを見つけてつなげられると、それらが生きてくると思います。よ〜く見つめてみましょうね。

ところで、私は最近になって、家から歩いて1分くらいの所にある^{せんとう}銭湯に行くようになりました。(といっても週に一回くらいですが)^{あわ}泡風呂、水風呂、ワイン風呂、そして何よりもサウナがあるということが、私を銭湯に^{いざな}誘うのです。日暮れに風呂桶を持って、^{すず}涼しい^{あきかぜ}秋風の吹く道のりを、ぼんやりと歩いて行き帰りするこの^{こころ}心地よさ。何とも言えない至^し福のひとときです。

このことをある知人^{ちじん}に言いますと、こう切り返されました。「銭湯っていうもんは、たいてい右が男風呂^{おとこ ぶろ}で、左が女風呂^{おんな}になっとな知っとるで?」「へっ?」この後もいろいろ話をしてくれました。「日本人の意識の中に『右は良くて、左は悪い』というニュアンスの言葉が意外に多く、それがいろんな差別意識に利用されている。たとえば、『右舞い=景気^{けい き}がよい』『左舞い=景気^{ひだりま}が悪い』『左団扇=仕事^{うちわ}をしなくても気楽^{きらく}にできる』など……。これらのことが女性差別と結びついて、銭湯でも『右=男、左=女』となっている」というのです。なるほどです。と同時に、「こんな所にまで差別意識が利用されてきたのか!」と、^{おどろ}驚きでした。気づいてる人は気づいてるんですね。気づいていない私は、まだまだです。みんなでこんなことに気づき、不合理な差別をともになくしていく仲間となれることを、期待して止みません。みなさん!頑張りましょう!



①^{しん}新ちゃんのお笑い^{わら}人権^{じんけん}高座^{こうざ}〜笑顔^{えが}美し^{おうつく}〜人権^{じんけん}落語^{らくご}家^か・露^{つゆ}の新治^{しんじ}(9月21日:町民センター)

いや〜おもしろかったですねえ!!さすがプロの落語家です!何でもプロフェッショナルは、やっぱり違います。笑いのコツを知っとるっていう感じですね。

なかでも私が一番面白^{おもしろ}かったのは、「ちりめんじゃこ」。ほとんどの人がわからんと思い

ますので、ちょこっとだけ説明させていただきます。

差別意識のもつイメージは、一体どこから来るかという、それは初めてそのことに触れたときの情景が問題なんだそうです。たとえば、小さい子どもの前でお父さんが被差別部落の悪口をお母さんに言っているとします。そこでお母さんが「お父ちゃん、何も子どもの前でほんなこと言わんでもー！」なんて言うと、子どもとすればやはり気になります。それで純粋に「お母ちゃん何のこと？」なんて訊こうものなら、「子どもは知らなくてええの！シッ！」てえな感じですよ。ほら、子どもとしたら『何や、えらいこわい雰囲気やなあ。こら、絶対しゃべったらあかんのや……』と思います。ほれが、部落に対するイメージになってしまうんです。

ほれが例えば、お父ちゃんがちりめんじゃこの悪口言うてたとすると、どうでっしゃろ。お母ちゃんが「お父ちゃん、何も子どもの前でちりめんじゃこのことと言わんでも……おこわ、口にただけでもこわいわ！」なんて言おうもんなら、子どもの頭ん中には『ちりめんじゃここっちゃあよっぽどこわいんや！』ってなります。こわいでんなあ、イメージっちゅうもんは。

他にもありまっせえ。カミナリ。「カミナリ鳴りよった！早うおへそ隠さなカミナリさんを取られるでえ！」って言うてる、おばあちゃんの顔がこわいんやて。よう知らんとこわがる意識が、差別意識と握手しまんねや。気いつけなあきまへんなあ。

あつ、露の新ちゃん、こんなことも言うてはりましたな。差別につきものなのは、二つあって、一つは今言うてはりました「イメージ」。もう一つは、「湿り気」。

ウンコはウンコでも、渴いてたら靴で転がそう思うたら転がせますけど、出来たてのほやほやで湿った、グニャッてなるやつは、なんや汚いような気がしますわな。そんなもんですわ。

まあ、なんやかんや言うたかて、「起きて半畳、寝て一畳。天下取っても二合半。かわやに入ればみな同じ。風呂に入ればみな裸！」でっせ。どんな偉い言われてはる人でも、体起こして半畳は出まへん。寝たら一畳ぐらいなもんですわ。たとえ天下取った人間でも、よう食べられて二合半ぐらいや。ましてや、かわや(便所)に入った格好はみんな同じや。風呂に入って水着着てる人なんかおりまへんがな。み～んな同じ。どこ～も変われへん！ホンマに正しいことが、一番強いんや！ただそれだけですわ。

自分の人生、自分が主役！一生一度の人生を、みんなが思うように生きまへんか！！

以上、新ちゃんレポートでした～お・わ・り！

「天の瞳」で教育を問う

灰谷健次郎さんに聞く

〈上〉

「天の瞳」「太陽の子」など、どのベストセラーで、子供から大人まで幅広いファンを持つ作家の灰谷健次郎さんが、久しぶりに長編小説を発表した。「天の瞳」(幼年編Ⅰ、Ⅱ)(新潮社刊、各二六〇〇円)だ。学校の枠からはみ出す強い個性を持った男の子の成長を追いつながら、現代社会や教育の癥をあぶり出している。灰谷さんに、作品のどこ、いじめなど今の教育のはらむ問題について聞いた。

「今の社会は子供にとって暗くてつらいものじゃないですか。大人の価値観を子供に押し付け、個性を持って自由に生きることができなくなっているから」

子供の背負う不幸は、大人の不幸にも重なる。親も教師も、だれ一人として今の教育がよいとは思っていない。なのに状況は、年々悪くなっている。突出する子供、いじめ自殺などは、それを突出的に表している。

「どんな社会でも人間が生きていけば悩みが出てくる。今の子供は自分の苦しみ悲しみを、

だれにも聞いてもらえない。教師も親も大半は、いった激励するだけでしょう」

子どもにはつらい現代 枠にはめ込み生命力奪う

いじめにしてもそうだが、「だれでもいいじめ、まだいじめられて大きくなった。ある意味では必死闘とも言えるかもしれない。けれど、いじめられたところさや悲しみをだれかが聞いてくれば、またた気を取り直して生きとゆけるものなんです。それがいないところに現代の社会や学校の病巣がある」

学校は本来、人間を育てる場所であるはず。それがすっかり忘れ去られていると、十七年間の教師経験を持つ灰谷さんは憤る。

「今学校で起っていることをそのまま書いたら、小説にもならへん。例えば、罰として子供に廊下の板をたたく(なめさける)教師が現実にいる。それを書いて、そんなひどい教師がいるはず

がない、リアリティーがないと言われてしまふ。それってひどい状態なんです」

それでも親たちは、いい学校に入り、いい会社に就職するのが幸せと信じて、子供たちを追い立てる。

「大人の恣意(しい)に子供をはめようという意識が、今は強いとは言いにくい。軍国主義時代に戦場に駆り立たされたに近いような価値観が現代を支配しています」

大人の作った枠に押し込まれ、子供たちの生命力はどんどん希薄になっている。

「子供は本来、強い生命力を持っているのに、それを表現できなくなっている。自分の声でものが言えなくなっている。これは人間の衰退を感じさせて、怖いですね」。



「今は、子供にとっても大人にとっても、悩みが深い複雑な時代」と語る灰谷健次郎さん(東京都新宿区)